

## 第II部 : 職業希望の形成と職業情報

吉本, 圭一  
雇用職業総合研究所

<https://hdl.handle.net/2324/18643>

---

出版情報 : 高校生の職業希望に関する調査研究報告書 : 中間報告, pp.83-102, 1986-03-01  
バージョン :  
権利関係 :

## 第2章 進路をめぐる悩みと学校生活

高校生の進路意識の形成にかかる高校の影響として、学校による進路指導の重要性はいうまでもない。しかしそうした組織的な活動も、高校の影響のひとつの側面にすぎない。生徒の進路意識、職業意識の形成に対しては、高校生活のさまざまな要素が関わっているのである。ここでは、第1節で高校での学業の状況や友人関係と進路選択とについて検討してみよう。そして、第2節では、進路をめぐる悩みに焦点をあてて、今日の高校生活をえがいてみよう。

### (1) 学校生活

#### ① 勉強と成績

高校卒業後の進学、就職の選抜においては、高校での学業の成果が問われる。ここでは、勉強時間や成績と進路意識との関連をみていこう。まず、図Ⅱ-2-1は、各進路希望の生徒の勉強時間を比較したものである。女子のほうが、勉強時間が長く、また進学希望者のほうがより勉強している。男子の就職希望者では、一日全然勉強しない者と30分未満の勉強時間しかない者が75%にもなる。それにたいして、女子の大学進学希望者では、2時間以上勉強しているものが半数をこえるのである。

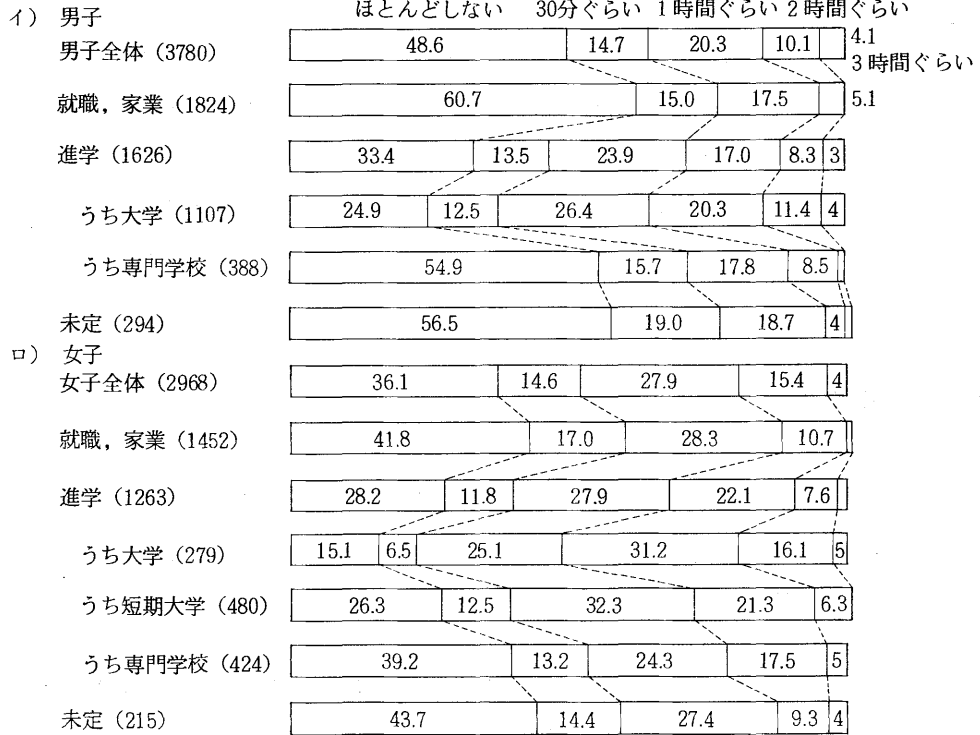
さらに、就職希望者のなかでも希望職業ごとに勉強の時間はちがっている。図Ⅱ-2-2にみるように、男女とも公務員希望の生徒がもっとも勉強時間が長く、男子の事務の職業希望、女子の専門的技術的職業の希望の生徒も勉強時間が長い。これに対して、男子の販売、生産工程、サービス、自営業の希望者の6割が、ほとんど勉強しないのである。

次に、学業成績については、「現在の成績で十分である」「もう少し上がればよい」「かなり上げないとだめである」「よくわからない」「成績は関係ないと思う」の5つの選択肢から回答してもらった。図Ⅱ-2-3でみるように、今の成績で十分に希望どおりの進路に進めると思う生徒は少なく、半数以上がかなり上がらないとだめだと思っている。とくに、女子の進学希望者では、自分の成績と目標との差を大きく考えている。この成績についての評価の傾向は、図Ⅱ-2-1でみた勉強時間の傾向と同様であり、勉強時間の長いものほど自分の成績と進路達成のための水準との差を大きく見ているのである。つまり、成績についての評価は、成績そのものの水準というよりも、むしろ生徒が達成したい目標の水準を示すものと考えた方がよいのではあるまいか。

就職希望者について、図Ⅱ-2-4で第1希望の職業ごとに成績評価をみると、希望

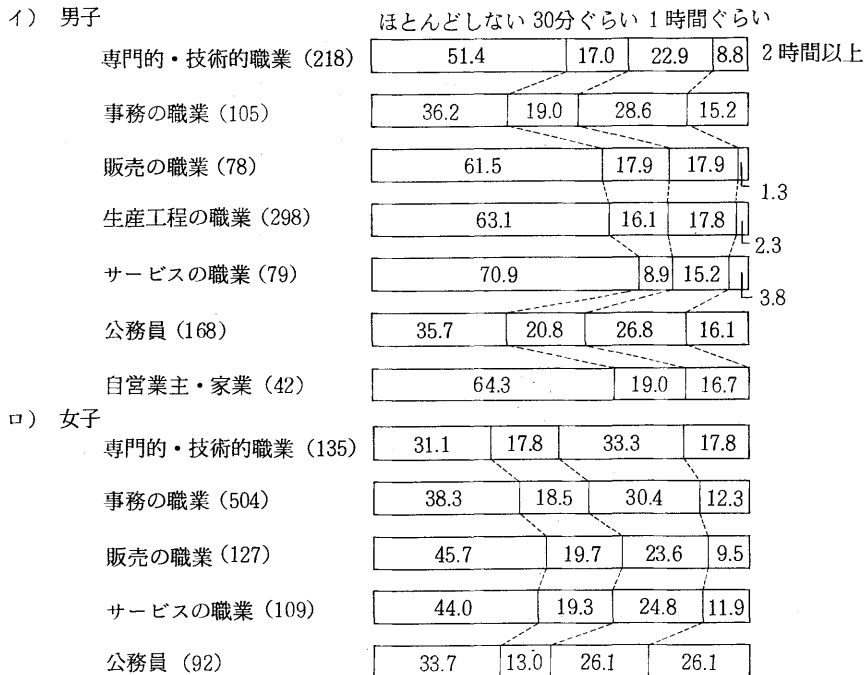
図Ⅱ-2-1 家での勉強時間

(%)



図Ⅱ-2-2 希望職業別の勉強時間

(%)



図Ⅱ-2-3 進路別にみた成績評価 (％)



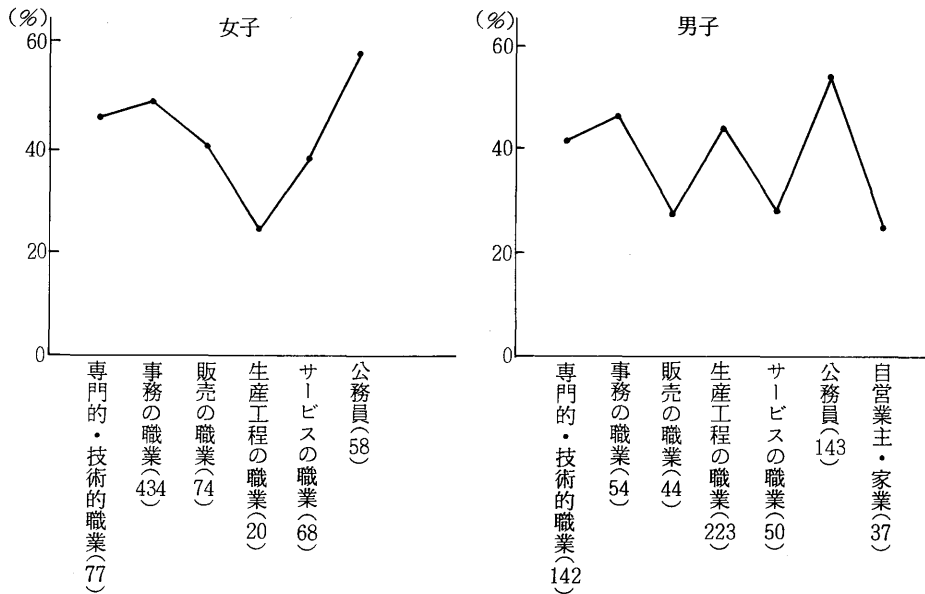
職業達成のための成績の落差を大きく感じているのは、男子では公務員、専門的技術的職業を希望する者、女子では公務員、事務の職業を希望する者である。今日、高校卒業者の公務員への選抜は厳しくなり、またOA化や大卒の進出で女子の事務職就職が次第に困難になっている。成績についての厳しい見方は、確かに納得できる。

他方観点をかえてみると、生産工程や販売、サービスの職業希望者についても、四分の一の生徒は自分の成績がかなり低すぎると感じている。つまり、就職することがさほど困難ではないと思われる職業についても、生徒自身は成績をかなり上げないとだめだと考えている。これは、同じ職種のなかでも会社の希望や地域の希望などの条件を満たしたいためであろう。だが、ともあれここからは、高校卒業後に就職する者にまでも、成績が進路達成のための重要な要素だという認識が強く存在していることが推察されるのである。

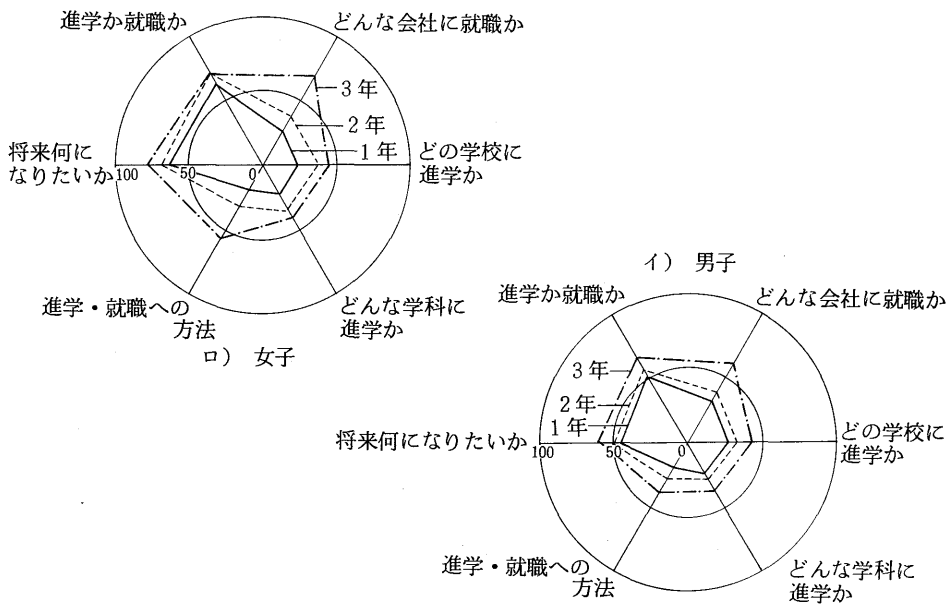
## ② 友人との相談

高校生にもなると、進路についても友人の影響が次第に大きくなっていくだろう。高校生たちは、進路をめぐる友人とどのような話をしているのだろうか。特に注目したい点として、普通科の就職者や職業科の進学者などのように、その学科としては少数者になる進路を希望する者たちが、友人とどのような会話をしているのだろうか。ここでは、

図Ⅱ-2-4 第1希望の職業別にみた成績の自己評価（就職希望者）



図Ⅱ-2-5 学年別にみた友人との会話



以下の6項目それぞれについて、友だちとの会話の頻度をたずねた。

- A. 将来何になりたいか
- B. 進学するか就職するか
- C. どんな会社に就職するか
- D. どの学校に進学するか

E. どんな学科に進学するか

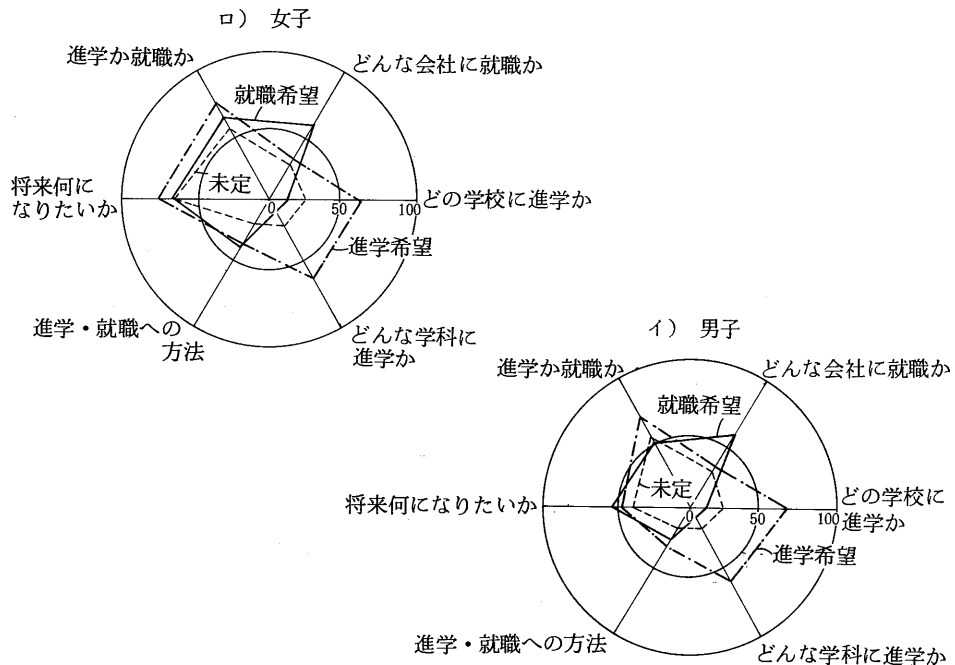
F. 進学や就職のためにどんなことをすればよいか

図Ⅱ-2-5は、各項目ごとに「よく話す」「ときどき話す」の回答を合わせた比率を学年別にみたものである。男子では1, 2年生の時にはあまり進路についての会話がなない。卒業をひかえた3年生になると、急に進路をめぐるさまざまな会話が交わされるようになる。これに対して、女子では、早くからいろいろな会話をしている。将来何になりたいかとか、進学か就職かといった話は1年生でも6割以上の女子が友だちと話をしているのである。この傾向は、女子のほうが希望職業の決定が早いという第Ⅰ部で指摘されていることと同様である。

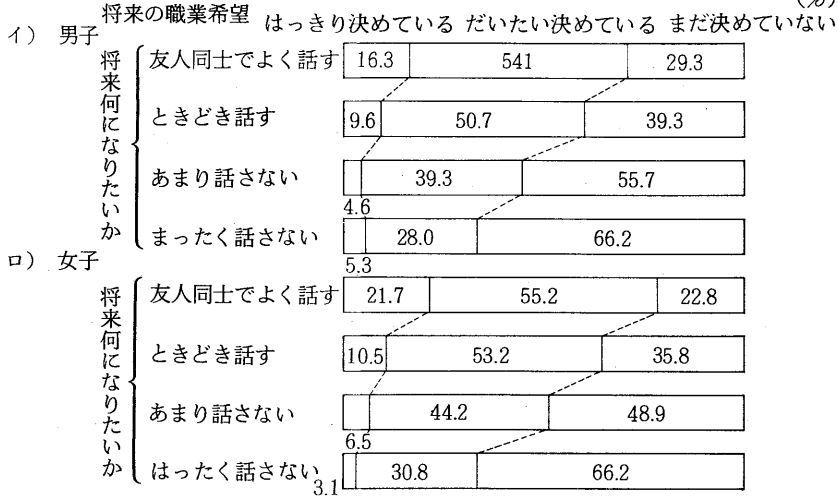
また、進学や就職の方法とか、どんな会社に就職するかなどについての話は、男女とも3年生になってとくに増えてくる。

こうした会話は進路希望ごとにみるとどうなっているだろうか。図Ⅱ-2-6のように進学希望者が進学する学校や学科についての、就職希望者が就職する会社についての会話を多くしているのは当然であるが、ここでは進路希望が決まっていない生徒の傾向が特に目を引く。普通には、進路希望が決まらない生徒ほど、将来何になるか、進学か就職かといった話が增多するのではないと思われる。ところが、実際の結果からみる

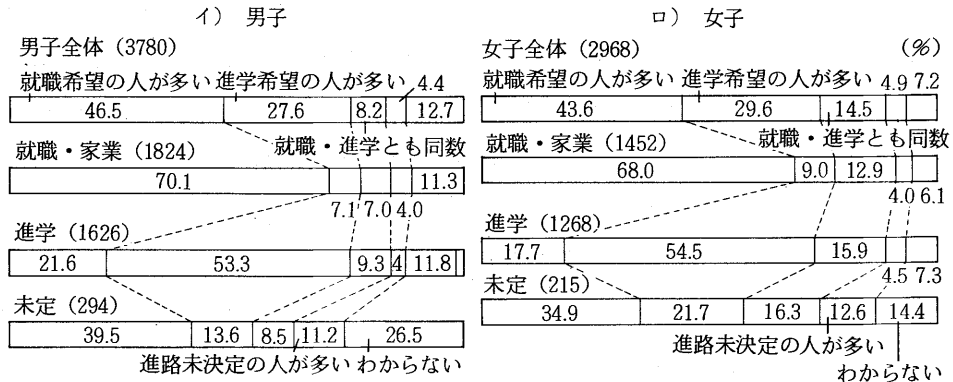
図Ⅱ-2-6 進路希望別にみた友人との会話



図Ⅱ-2-7 友人との会話別の希望職業決定状況 (％)



図Ⅱ-2-8 進路希望別にみた友人グループの進路



と、進路未決定の者ほどそうした会話がすくないのである。とすると逆に、友人同士の会話が少なかったために、希望の進路を決められないでいるという可能性が浮かび上がってくる。

そこで、図Ⅱ-2-7で友人との会話と希望職業の決定状況と調べてみると、友人同士の会話が多い者ほど希望職業が決まっている割合が高く、友人同士で将来何になりたいかを話し合うことの少ない者ほど自分自身の希望職業も決まっていなないのである。

つまり、こうした友人との日常の会話が、進路意識や職業希望の形成のために有効な情報になっているのかもしれないのである。

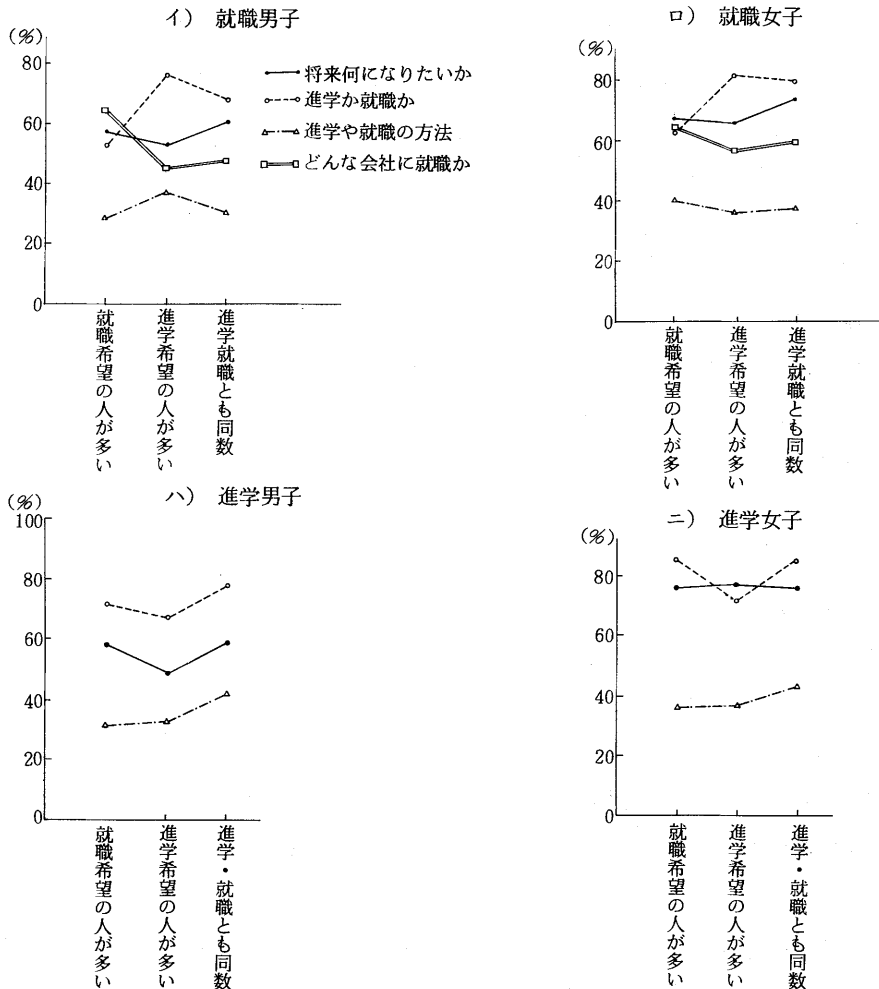
### ③ 友人の進路

高校は学科によって大きく進路が異なり、普通科に進学希望者が、職業科に就職希望

者が集まっている。つまり、進学希望者はもっぱら進学希望者同士で、就職希望者はもっぱら就職希望者同士で集まることになる(図Ⅱ-2-8)。そのため、就職か進学かと迷っていても、普通科では就職希望の友人が少なく、就職についての情報を友人から得ることはむずかしいのではないだろうか。また、逆に職業科の場合、進学については友人に相談に乗ってもらうことがむずかしいのではないだろうか。

そこで図Ⅱ-2-9から、友人グループの進路傾向とそのグループ内での進路をめぐる会話との関係について見ていくことにしよう。まず就職希望者の場合、就職希望の友人たちに囲まれていれば、進学か就職かということは当然ながらあまり話題とならず、また、将来何になるかといったこともあまり話さない。むしろ、どのようにして就職するかという方法に関心がいく。それに対して、進学希望者と就職希望者とが同数いる友

図Ⅱ-2-9 友人グループの進路とグループ内での会話





人グループの中では、就職希望の生徒も進学か就職かといった話をたびたびする。そして、将来何になりたいかという会話も多いのである。

他方、進学希望者の場合も、進学希望者に囲まれている場合には友人同士で将来の夢を話すといったことは少なく、就職希望者もまじっている場合にはそうした話をたびたびしているのである。

つまり、友人グループによって、進路についての会話の質もちがってくるのである。これが、進路意識などにどのような影響をおよぼしているのか、次節で進路をめぐる悩みについて分析する中で、考えてみよう。

## (2) 進路についての悩み

中学校からはほとんどの生徒が進学をする今日の日本では、高校がもっとも大きい進路の分岐点になっている。そのため、高校生たちは進路についてのさまざまな悩みをかかえていることだろう。ここでは、以下の選択肢を提示して、あてはまるものをいくつでも回答させた。

1. 進学か就職かで迷っている
2. 希望の職業が決まらない
3. 相談する相手がいない
4. 親や先生と意見が合わない
5. 仕事の内容や職業の実態がよくわからない
6. 希望する仕事につけるかどうか心配だ
7. 就職してうまくやっけていけるかどうか心配だ
8. 希望する学校や学科に進学できるかどうか心配だ
9. その他
10. 特に悩みはない

図Ⅱ－2－10に示すように、特に悩みはないという生徒は、男女ともに1割に満たない。男女ともに最も多いのは、希望する仕事につけるかどうか、就職してうまくやっけていけるかどうかについての心配である。進学の場合、希望校に進学できるかどうか、学業成績によってある程度は見当がつく。しかし、就職の場合、求人企業が変わったり、校内選抜で応募先をきめたりと、不確定の要素が多く、それだけ不安がつるのである。

図から明らかなように、こうした悩みは上級生になるほど増えてくる。また、比率は小さいが、親や先生と意見が合わないという悩みも、上級生ほど増えてくる。

仕事の内容や職業の実態がわからない、希望する学校や学科に進学できるかどうか心配だ、希望の職業が決まらないといった悩みも比較的多いが、こうした悩みはむしろ2年生のほうで多く、就職・進学目前の3年生ではいくぶん減っている。3年生になると、就職のための職業情報や進学のための情報が学校側から多く与えられるためかもしれない。また、もはや希望職業が決まらないなどと悩んではいられなくなるのであろう。

進学か就職かで迷っている生徒は、上に述べた悩みとくらべて少ない。またその比率は1年生でもっとも多く、上級になるほど少なくなる。特に悩みはない生徒も、学年進行とともに次第に減ってくる。

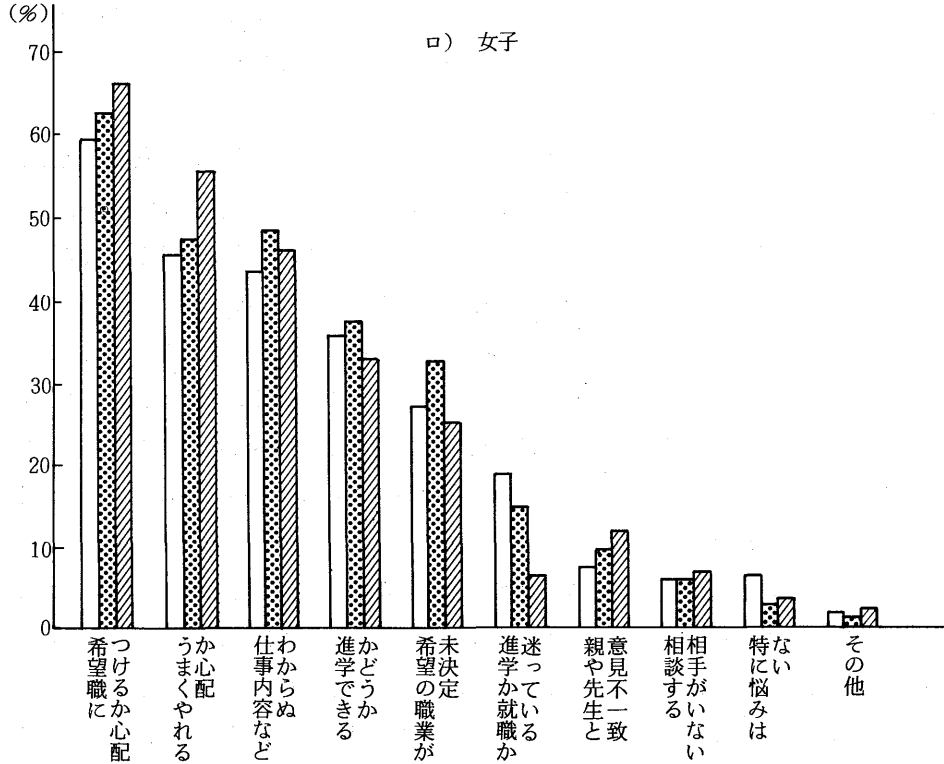
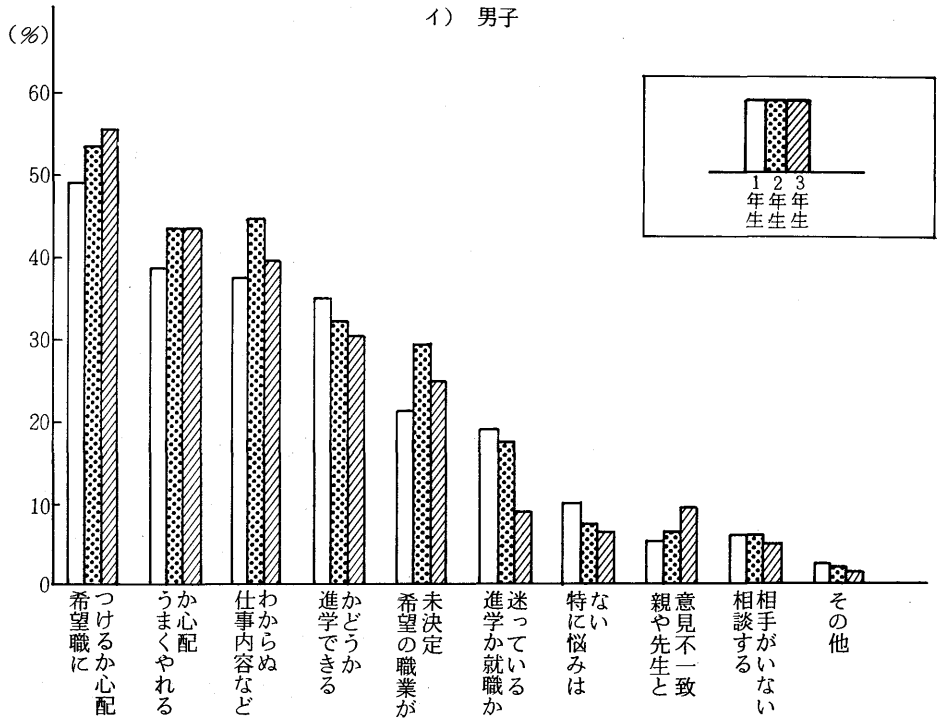
これを、図Ⅱ-2-11のように進路別・地域別にみると、進学希望者で希望の学校・学科に進学できるかどうか、就職希望者で希望する仕事につけるかどうかといった悩みが、どの地域でも一番多い。とりわけ、供給地域に著しい。逆に供給地域では、近くに進学や就職の機会が少なく、うまく就職や進学ができるかどうか、きびしい選抜がまちうけており大きな悩みなのであろう。そのため、早くから希望を決めるようになっており、そうした悩みは少ないようである。これに対して、仕事の内容がわからない、希望の職業が決まらないという悩みは、むしろ需要地域や需給バランス地域で多い。つまり、需要地域など進学の手続きも就職の手続きも恵まれており、特別に選り好みをしなれば希望する進路を実現するのはさほど困難ではない。しかし、機会が多いためにかえって、自分の希望をはっきりと決めにくく、進路意識の形成が遅れることになるという可能性が考えられるのである。

次に図Ⅱ-2-12で学科別にくらべてみよう。就職希望者の場合、普通科の生徒は職業科の生徒よりも希望する仕事につけるかどうか、また就職してうまくやれるかどうか心配しており、男子では希望の職業が未決定で悩んでいるものも多い。他方、職業科の生徒では、男女とも全体に進路についての悩みが少なくなっている。

これが進学希望者の場合となると、逆に職業科の生徒の悩みは重大である。職業科から進学しようとする生徒のなかの3割が、そもそも進学するか就職するかという次元での悩みをかかえているのである。他方、普通科ではこうした悩みはわずかであり、大学や専門学校卒業後につく将来の職業について希望が決まらないとか、内容がよくわからないとかといった漠然とした悩みが多いのである。

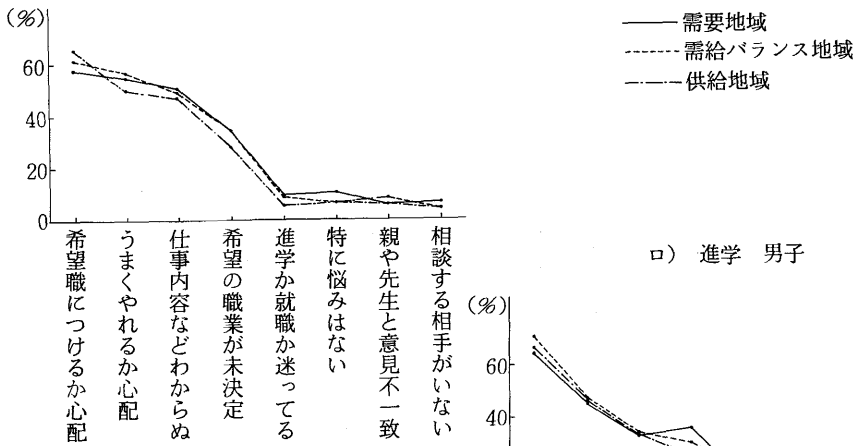
このように普通科における就職者と職業科における進学者は、それぞれの学科内での少数派であり、進路をめぐる悩みが大きくなっている。ここには、ひとつには、進路指導が多数派を中心に組織されているという問題もあるかもしれない。しかし、進路指導そのものは、組織的でないかわり、むしろ個別的に指導ができる可能性もある。彼らの

図Ⅱ-2-10 学年別にみた進路についての悩み

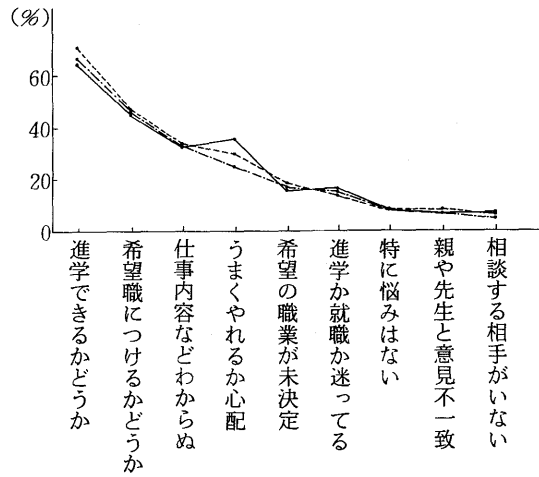


図Ⅱ-2-11 進路についての悩み<地域別>

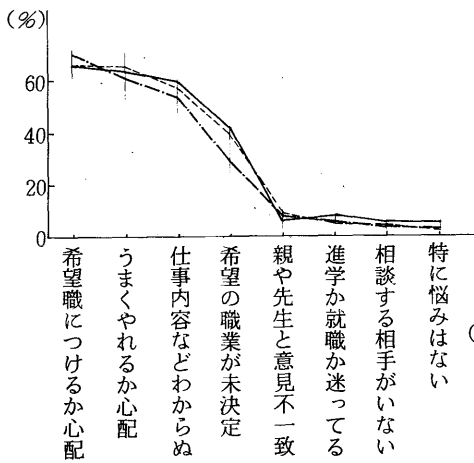
イ) 就職・家業 男子



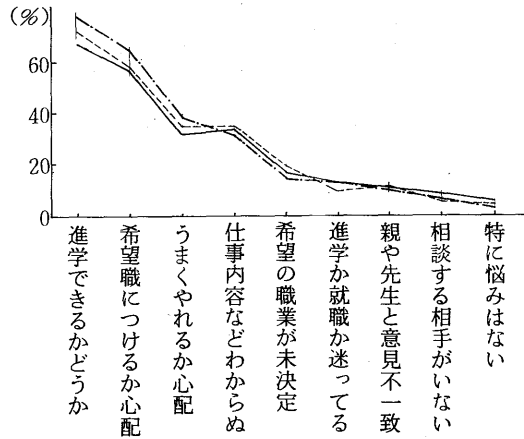
ロ) 進学 男子



ハ) 就職・家業 女子

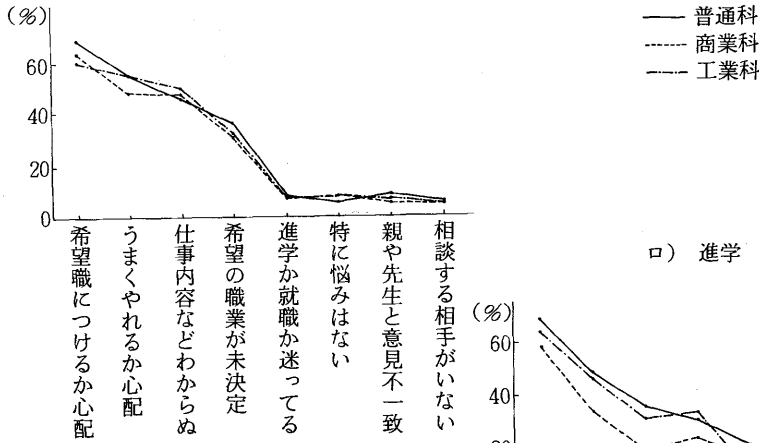


ニ) 進学 女子

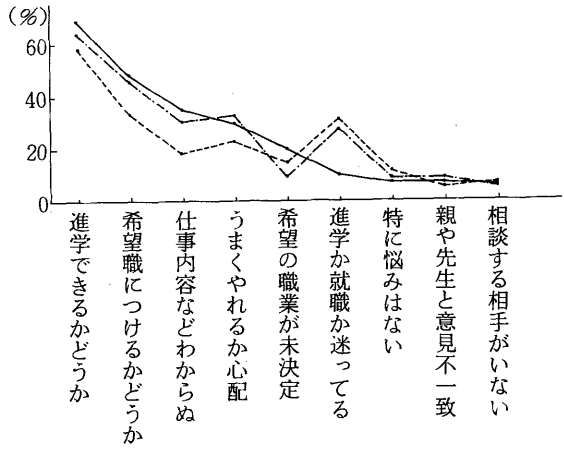


図Ⅱ-2-12 進路についての悩み<学科別>

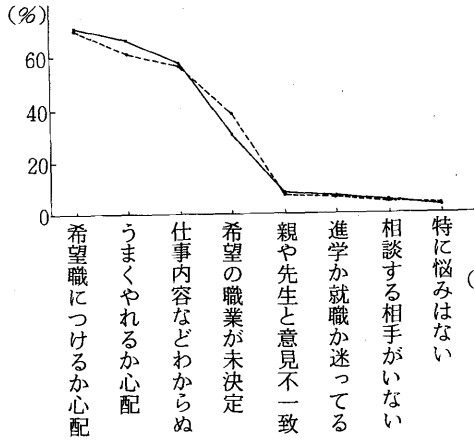
イ) 就職・家業 男子



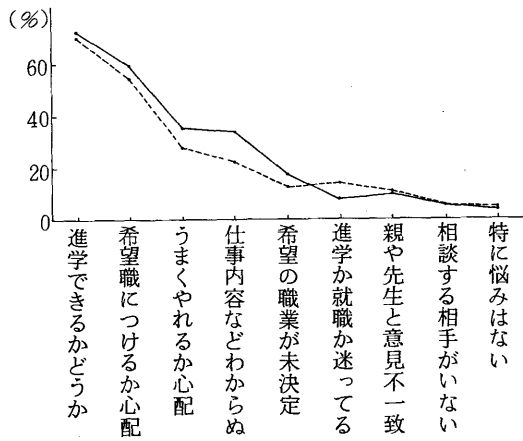
ロ) 進学 男子



ハ) 就職・家業 女子



ニ) 進学 女子



悩みを大きくしている重要な要素は、結局のところ、それぞれの学校の進路をめぐる雰囲気とでもいえるものではあるまいか。そうした雰囲気をつくりだしているものとして、たんに進路指導や学校側のはたらきかけだけではなく、むしろ友人グループやその学校内の生徒たちが重要であろう。

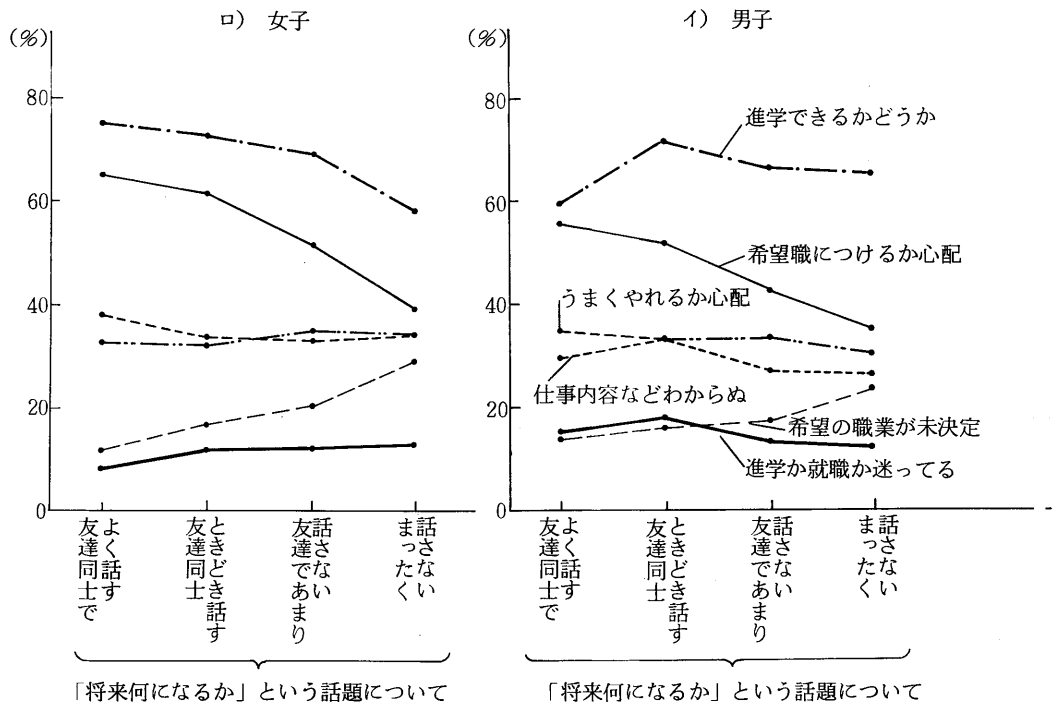
そこで、前節で扱った友人同士での会話のあり方と、進路をめぐる悩みとの関係を見ていこう。図Ⅱ-2-13に示されるように、将来何になるかといった話を友人同士で多くしている者ほど、希望する職業が決まらないで悩むことが少なくなっている。このことは、少数派の進路を希望するものにとっては、そうした会話の有無が、職業意識の形成にとってかなり重要な要素となっていることを示しているのではあるまいか。

つまり、いろいろな進路希望の生徒がいる場合、その友人グループは、夢を語ったり、基本的な悩みを相談し、そして結果的には進路意識を育てる場になりうるかもしれないのである。

学業や友人関係など高校生活と希望する進路、職業との関連を調べた結果、以下の知見をえた。また、進路をめぐる悩みについてもまとめてみよう。

- ① 勉強時間は、男女差が大きく、女子の方が多い。進路別には進学希望者で、また就職希望者の中では公務員希望者で勉強時間が多い。

図Ⅱ-2-13 友人との会話と進路をめぐる悩み



- ② 成績についての自己評価をたずねたところ、大半の生徒が、かなり成績を上げないと希望の進路や就職が実現できない、と考えている。しかも、こうした自己評価は、先の勉強時間の傾向と対応している。つまり、勉強時間の多い進学希望の生徒や公務員希望の生徒ほど目標と現在の成績との落差を意識している。
- ③ 友人との相談は女子の方が早くからしている。また、進路別には、進路希望が未定ほど、むしろ友人との相談をあまりしていないのである。ここからは、進路希望や職業希望の形成のうえで友人グループがはたす役割が推察される。
- ④ ところが、今日の高校は学科ごとに進路が大きく異なるため、友人グループの中の進路希望も一方に偏っている。そのため、普通科などの進学希望グループのなかの就職希望者や、職業科などの就職希望グループのなかの進学希望者は、グループの少数派であり、将来何になるかとか、進学か就職かななどをグループのなかであまり相談できない。進学と就職と同数の友人グループのなかでは、もっともひんぱんに友人同士の相談が行われているのである。
- ⑤ 高校生たちには、進路や将来の職業をめぐってさまざまな悩みがある。最も多いのは、希望する仕事につけるかどうか、就職してうまくやっていけるかどうかについての心配である。地域的には、供給地域で希望を実現できるかどうかの心配が強く、その他の地域では希望の職業が決まらないという悩みが多い。
- ⑥ 学科別には、普通科の就職希望者では、希望の仕事につけるかどうか、就職してうまくやっていけるかどうかなどを悩んでおり、普通科男子では希望の職業が決まらないで悩むのも多い。他方、進学希望者のなかでは職業科生徒の悩みが大きい。彼らの3割が、進学か就職かということに、まだ悩んでいるのである。すなわち、それぞれの学科での少数派にあたる進路を希望するもので、多くの悩みをかかえているのである。

(吉本圭一)